



Title	自己をめぐる認知心理学研究の今 : まえがきに代えて
Author(s)	仲, 真紀子
Citation	自己心理学 : 認知心理学へのアプローチ, 仲真紀子編, ISBN: 9784760894147, pp.1-5
Issue Date	2008-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44768
Type	bookchapter
File Information	NSA2008_1-5.pdf



[Instructions for use](#)

自己をめぐる認知心理学研究の今

—まえがきに代えて—

認知心理学は、人の認知活動や認識過程を扱う学だとされる。知覚、記憶、学習、言語、思考など、頭のなかで起きるさまざまな過程のメカニズムを実証的に解明することが認知心理学の目的となっている。客観性を旨とし、実験や調査により多くの知識を積み重ねてきたが、ふと、これはいったい誰の認知過程なのだろうと思うこともある。認知心理学で研究しているのは誰のものでもない、一般的普遍的な過程であって、それは現在のみならず、過去の時代を生きた人にも、これから生まれてくる人にも、東西の地域、文化差によらず成り立つものだと思定されている。個人差は誤差として扱い、法則性を明らかにするために研究しているといえる。

しかしこの科学的立場は一方で、不全感というか、何かほんとうに知りたいことがわからないという気持ちを作り出すこともある。大学で認知心理学を専攻したいとやって来る学生のなかに、「思っていたのと違う」という人がいる。統計や実験になじめないということもあるかもしれないが、「誰の」というのが抜けていて、心理学をやっても自分の心もあなたの心もわからない、ものたりない、と感じるのかもしれない。「ヒトの記憶は……」「ヒトはこのように……」という表現では、ヒトのなかに自分も含まれているのだとは感じにくいかもしれない。

そのようななかで、本書は「私」にかかわる認知心理学的アプローチをまとめたものである。第Ⅰ部「私が生まれるところ」、第Ⅱ部「遍在する私」、第Ⅲ部「語られる私」のテーマのもとに11の論文と10のトピックが収録されている。「私が生まれるところ」には発達心理学的な研究を、「遍在する私」には脳、時間軸、インターネットのなかに現れる自己の研究を、「語られる私」には自伝的記憶、想起にかかわる研究を収めているが、以下、必ずしもこれらの枠組みにとらわれず、認知心理学における自己研究の流れとともに各論文の位置づけ

を試みたい。

ここ10～20年の間に自己に関する認知心理学的研究は大きく発展した。そこには主に3つの柱があるように思う。第一は、自己意識の発生やその特徴にかかわる研究であり、心の理論やエピソード記憶の発達なども深くかかわる。心の理論といえば、私の自伝的記憶の中では、ノッティンガム大学のP. ミッチェル教授が1998年の来日の折に話された、千葉大学での研究会の風景に思いがいたる。スライドであったかパワーポイントであったか、サリー、アン、そしてスマーティ（チョコ）の線画や写真が提示された。

ピアジェの発達理論によれば、幼児は自己中心的であり、他者の視点がとれないとされる。しかし心の理論研究は、幼児が他者の視点のみならず、自分の心さえ必ずしも理解していないことを示した。幼児にチョコレートの絵が書いてある箱の中身を見せて「何が入っているかな？」と問うと、「チョコ」と答える。そこで実験者は実際にはエンピツが入っていることを示す。次に実験者は他所から来た人物にこの箱を見せようと幼児に提案する。「あの人がこの箱を見たら何が入っていると思うかな？」箱の中身がエンピツであることを知っている幼児は「エンピツ」という。ここまでは自己中心性により説明できるが、実験者が「だってあなた、さっきこの箱の中身、何ていった？」と問うと、幼児は典型的には「エンピツ」と答える、その答えは自己中心性によっては説明できない。幼児は過去の自分の心の状態を現在の心の状態と区別して認識することができないのである……というような話であったと思う。

幼児が自分の心の状態を知ることができるようになるには、長い道のりがかかる。その発達には神経基盤の充実や、自己の姿や自分の内面性の理解、きょうだいや親との相互作用など、さまざまな要因がかかわっている。このように複雑な自己という「源泉」の研究が、脳と行動の両サイドから推し進められている。

本書では、1章において内藤美加氏が自己体験的意識の発生について（「時間の旅，“私”の体験，そして語られる文化」）、3章において中島伸子氏が幼児期の自己イメージについて（「ポジティブな方向に変遷する私というイメージ」）、4章では板倉昭二氏が自己意識の発生（「私という意識の発生」）について書いてくださった。また、5章において田中茂樹氏が脳に表現される自己意

識や自己体験的な意識を（「脳のなかの私」）、7章では勝谷紀子氏がインターネットのネットワーク上に現れる自己の姿（「ネットに現れる私」）を書かれている。川田学氏、加地雄一氏、中尾敬氏、藤桂氏は自己意識の発生や主体としての自己に関する興味深いトピックを寄せてくださった。これらはみな、私たちが自分にどのように気づき、自分をどのようにとらえているかと深くかかわる研究である。

自己の認知心理学研究の発展を支えている第二の柱は自伝的記憶の研究であろう。U. ナイサー氏らが提唱した自然文脈での認知研究の推進、M. コンウェイ氏らが数年おきに主催している国際記憶会議なども自伝的記憶研究の活性化に大きく貢献したと思われる。私自身は、1990年デューク大学のD. C. ルービン氏のもとで過ごした10カ月間の在外研究に思いがつながる。

ルービン氏の実験室のドアには「noetic lab（知ることの研究所）」という小さなラベルが貼ってあって、氏は歌詞の記憶、感覚の記憶などの研究をしていた。数年前から手がかり語法を用いた自伝的記憶の研究も始めていたが、それは高齢者に「木」「ワイン」などの手がかり語を提示し、過去の出来事を思い出してもらうというものであった。たとえば30個の手がかり語のそれぞれに対し、出来事の記憶を思い出してもらう。そして、その出来事がいつ起きたのかを尋ねる。そうすると20代を中心とした記憶が他の時代の記憶よりも多く想起される。そのため、これらの記憶の想起度数を時間軸上に示すと10代から30代のあたりに度数のコブ（バンプ）ができる。

このような手がかり語法をもちいた研究のみならず、この20年の間に自伝的記憶の研究は飛躍的に発展した。自己は自己にかかわる記憶からできあがっているとさえいえる。私たちが何を記憶しどのように想起するかは、現在、自己の認知心理学研究の核の1つになっている。

本書では2章において上原泉氏がエピソード記憶の発生について（「思い出しの始まり」）、6章ではD. C. ルービン氏とD. バートン氏がバンプおよび個人の自伝的記憶の中心をなす記憶について（「ストレスフルな出来事の記憶」）、8章では佐藤浩一氏が自伝的記憶の構造について（「私の構造」）書いておられる。さらに慎洋一氏、下島裕美氏、福田剛氏が自伝的記憶にかかわる最前線のトピックを寄せてくださった。これらはみな、一貫した自己をかたちづ

くる、「私の」蓄積をあつかった研究である。

第三の柱は、目撃証言研究にはじまる法と心理学研究ではないかと思う。エピソード記憶は認知心理学における大きな研究テーマだが、上述したように、個人差は誤差あるいは結果をゆがめる障害としてとらえられがちであった（「りんご、さかな、かいだん……」といったリストを学習するのに、たまたま参加者の1人がりんごを食べたばかりであったらどうであろうか）。また、一般の記憶研究では、「実験者により与えられた刺激」の記憶の正確さが問題なのであって、個人がお昼に食べたものや、昨日着ていた服装などは、いわばどうでもよいことだとして無視されてきた。しかし、目撃証言や被害供述などがかわる司法場面では、個人が見たこと、体験したことが重要である。それを正確に思い出せるかどうかは事件や紛争に解決をもたらす大きな手がかりとなる。E. F. ロフトス氏らの研究に代表される目撃証言の信用性や偽りの記憶の研究は、自己を形成する自伝的記憶研究と重なりながらも、独自の研究の道筋によって自己の理解に貢献してきたように思う。

1996年、あるきっかけで私はロフトス氏と1週間ほど中国を旅する機会にめぐまれた。毎日たくさんのお話をしたが、話題の中心は偽りの記憶論争であった。ありとあらゆる話をし、最終地点の上海の河岸で10年後にここでまた会いたいねと話したことが思い出される。その10年も過ぎてしまったが、この間に体験の「正確さ」に関する研究、正確さに関する信念の研究、正確ではない記憶（偽りの記憶）の研究は大きく進展した。

本書では、9章において松島恵介氏が、私たちは体験したことをほんとうに思い出せるのかという問題について（「私だった私」）、10章において森直久氏が構築される事実について（「想起する私を発見する」）書いてくださった。11章では仲が記憶の抑圧と回復およびその信念について（「私の記憶、私の信念」）書いている。また、越智啓太氏、石崎千景氏、浜田寿美男氏が重みのあるトピックを寄せてくださった。

ここでみたように、そして本書によく表れているように、認知心理学の研究においても「誰の」が問われるようになった。認知心理学の青白かった頬に赤みがさし、バラ色になってきたように感じる。これからも思索と実証的方法を

大切にしながら、さらに自己にかかわる認知心理学研究のフロンティアを広げていければと思う。

本書は、企画当初ご協力いただいた山下清美氏と相談しながら構成を考え、第一線で活躍しておられる方々に原稿を依頼した。早くに書いてくださった執筆者の方々には、私の力不足で編集に時間がかかってしまったことを深くお詫びする。また、この機会を与えてくださった榎本博明氏、岡田努氏、下斗米淳氏にも深く感謝申し上げる。

2008年春

編者 仲 真紀子